昭和48年10月1日発行（毎月1回1日発行）第22巻・第12号　昭和29年6月23日　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号　昭和30年3月24日第三種郵便物認

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOU

ホーカー
テンペス

☆特集☆
新段階に入った"日本の航空機工業"
英空軍の爆撃／航法コンテスト参加機
3ch RCグライダー"キャリフラワ"

'73 OCTOBER 10

$3.00

真紅に塗ったQF-4Bファントム II。ポイントマグーの米海軍ミサイル・センターの所属機。 (Photo by C. Graham.)

先月号と同じく第124戦闘飛行隊（VF-124）のF-14A。ミラマー海軍基地にて。（Photo by C. Graham）

海兵隊第451戦闘攻撃飛行隊（VMFA-451）
のF-4JファントムII（Photo by C. Graham）

（上・下）アラスカのエレメンドルフ空軍基地で撮影したF-4Eファントム II。第43戦術戦闘飛行隊（43rd FTS）の所属機である。
（Photo by D. Sternik）

〔上〕機首のレドームを張り出した海兵隊の航法訓練機TC-4C。（Photo by C. Graham）

〔下〕アラスカのエレメンドルフ空軍基地で撮影したEB-57Eキャンベラ。第5040特殊作戦飛行隊（5040th SOS）の所属機。
（Photo by D. Sternik）

〔上〕コースト・ガードのVC-11AガルフストリームII。ナショナル空港にて。(Photo by J. G. Handleman)

〔下〕アラスカ・エア・ガードのC-123Jプロバイダー。エレメンドルフ空軍基地にて。(Photo by D. Sternik)

英空軍爆撃・航法競技会の参加機

RAF Strike Command Bombing & Navigation Competition

(Photo by Inter Air Press)

(Photos by Air-Inter Press)

Black Panther's head emblem of No.1 Group Vulcan B.2

英空軍の爆撃航法競技会参加機のマーキング。

〔上〕バルカンB.2の胴体に描かれているブラックパンサーの首。攻撃軍団の第1グループのエンブレムである。

〔左〕ビクターSR.2の機首左側面に描かれている楯。ウェイトン連隊の各スコードロンのシンボル・マークを一緒に記したもの。

Shield Carried by a 543 Squadran Victor SR.2

オランダの空軍機

Piper L-21 Super Cub, 300 Sqdn., R.Netherlands A.F.

パイパーL-21スーパーカブ（R-110 54-2338） オランダ空軍第300中隊所属機 [illegible]
6月31日、オランダ空軍50周年記念飛行展示が行なわれたデーレン空軍基地で撮影。
(Photo by [illegible])

North American P-51K Mustang of Royal Netherlands Indish Army

"サンタナ" の自家用機エレクトラ

〔上・下〕アメリカのラテン・ロックのグループ "サンタナ" の専用機ロッキードL-188エレクトラ。去る6月下旬，日本での公演のために板付空港に飛来したときのスナップ。エレクトラを自家用機として乗りまわしている "サンタナ"，豪華な音楽グループである。
(Photo by CBS SONY)

キプロス島の英空軍部隊

RAF stationed at Cyprus Island.

キプロス島の防衛任務についている英空軍第56スコードロンのライトニングF.Mk.6。胴体側面にファイアストリーク空対空ミサイルを装備（Photo by Rolls-Royce）

地中海の要衝キプロス島にはイギリス空軍の近東空軍隷下のライトニング部隊1個中隊，バルカン部隊2個中隊それにハーキュリーズの部隊1個中隊が駐留している。ここの写真はその

上の写真はウェポン訓練のために同島のアクロチリ英空軍基地に派遣された第1スコードロンのハリアーT.2（左）とビクター給油機。編隊でアクロチリ上空を飛行中。

キプロス島アクロチリ英海軍基地のエプロン。手前は同基地駐留の英近東空軍第56スコードロン所属のライトニングMk.6，向側は武装訓練のために同基地に派遣された第1スコードロンのハリアーGR.Mk.1。

Photo by Rolls-Royce）

前ページと同じくアクロチリ基地のハリアーとライトニング。ハリアーは垂直離陸にスタートするところ。手前のアラート・ハンガーには，第56スコードロンのライトニング2機が24時間，スクランブル待機についている。
(Photos by Rolls Royce)

〔上・下〕アクロチリ基地エプロンのハリアー。搭載武装訓練で同島に派遣された第1スコードロンのハリアーは，GR.Mk.1が8機と複座のT.2が1機。英本国のウイッタリング基地から330ガロンの長距離用増槽2個を装備して飛来したが，途中でビクター給油機から空中給油を受けている。

(Photo by Rolls-Royce)

〔上〕キプロスのアクロチリに駐留する英空軍爆撃連隊のバルカンB.Mk.2。地上にとけこむ迷彩色に注意。

〔下〕主翼下に330ガロンの長距離用増槽をつけてアクロチリに到着したハリアーGR.Mk.1。左手にバルカン，ハンガー内にライトニングが見える。第1グループのハリアーはキプロスで5週間の武装訓練を終え，無事帰国しているが，訓練の使用兵器は4ポンド訓練弾，SNEBロケット，25ポンド・フリーフォール爆弾，30mmアデン砲で，8機の合計飛行時間は300時間，機関砲1万発とロケット弾2,000発を発射，爆弾500発を投下している。

（Photo by Rolls-Royce）

ツポレフTu-16バッジャー

Tupolev Tu-16 Badger of the Northern Fleet Naval Aviation.

北海の守りについているソ連北洋艦隊海軍航空隊のTu-16バッジャー。前方は給油母機で，主翼端に給油装置をつけている。ソ連海軍は現在このTu-16爆撃機を約400機装備しており，そのうち100機が偵察／給油母機とみられている。偵察型は漸次Tu-22と代替されている。

(Photo by TASS)

HS.125とPS-1の10号機

⬆Hawker Siddeley HS.125-400 of Trader Airways' Limited

〔上〕イギリスのトレイダー・エアウェイが購入したホーカーシドレーHS.125-400。双発ビジネス機HS.125はこれまでに260機余が売れており，そのうち210機余は海外に輸出されている。(Photo by Hawker Siddeley)

〔下〕7月31日に神戸沖で初飛行したPS-1の10号機。尾翼にはすでに第31航空隊の記号をつけている。

(Photo by H. Hamano)

⬇The first flight, the 10th machine of PS-1 Flying-boat.

グリーンハム・コモン基地で開かれた

The Royal Air Force display at Greenham Common.

英空軍航空ショー

去る7月7日と8日の両日、イギリスのグリーンハム・コモン基地で開かれた英空軍の航空展示会。英空軍のほかに同海軍と陸軍、アメリカ陸海空軍、オランダ空海軍、フランス海軍、西ドイツ空海軍、カナダ国防軍といったNTO諸国陸海空軍機の参加もあり、さらに2次大戦機や古典機の飛行展示などもあって、航空ファンにとっては、またとないすばらしい航空ショーであった。これはその参加機の一部である。

〔上・下〕レッドトップ空対空ミサイルを装備して参加したBACライトニングF.3。ライトニングの第一線パイロットを養成する第226実用訓練部隊（OCU）第2訓練スコードロンの所属機。英空軍では現在ライトニングはF.2、3、6各型を含めて約140機装備しており、9個スコードロンを編成している。

（Photos by Mr. Clive W. Moggridge.）

〔上〕迷彩塗装をしたF-5B複座練習機。オランダ空軍の第313中隊の所属機。オランダ空軍では、同国でライセンス生産したNF-5Aを1970年から実戦部隊に配備しており、現在の編成は2個中隊。F-104Gとともに防空の主力機である。

〔上〕アメリカ空軍のRF-4CファントムII。第10戦術偵察連隊（10TRW）第1戦術偵察飛行隊（1TRS）の所属機。
〔下〕西ドイツ空軍のファントムIIでRF-4E。第52偵察大隊（AKG52）の所属機。同空軍では本機で4個中隊を編成中。

〔上・下〕西ドイツ海空軍のＦ-104Ｇ。上は海軍航空部隊の所属機、下は空軍の第36戦闘爆撃大隊（ＪＢＧ36）の所属機である。西ドイツ海軍航空部隊は、約100機の飛行機を装備しており、Ｆ-104Ｇでは４個中隊を編成している。

〔下〕カナダ国防軍のＣＦ-104Ｇ、第421中隊の所属機である。カナダ国防軍はヨーロッパにＣＦ-104の戦闘攻撃部隊を２個中隊、偵察部隊１個中隊を駐留させている。１個中隊は６機から18機の編成。

〔上〕フランス海軍航空隊のＦ-8Ｅクルーセイダー。フランス海軍は38機のＦ-4Ｅを装備しており、２個中隊の迎撃部隊を編成している。写真の機体は第14艦隊航空中隊の所属機で、飛行ショーを終えて着陸するところ。

〔上・下〕イギリス空海軍のハンター。写真上はヨービルトン海軍基地所属のハンターＧＡ.2（シリアルＷＶ256）。写真下は空軍の第229実用訓練部隊（ＯＣＵ）第234“シャドー”中隊所属のハンターＦ.6（シリアルＸＥ608）である。

〔上・右・下〕フランス海軍のエタンダール4P。写真上は着艦フックをおろしたままでのデモ飛行。右はF-8Eへの空中給油の実演。写真下は離陸滑走中。第16艦隊航空中隊の所属機である。フランス海軍は、エタンダール4Mで戦闘爆撃中隊4個中隊、エタンダール4Pで偵察中隊2個中隊を編成している。

イギリス攻撃軍団の爆撃／航法競技会

先月号のアート・ページと本文記事でお伝えしたように、去る4月29日から1週間にわたってイギリスのウォデントン空軍基地で開かれた英攻撃軍団の73年度爆撃・航法競技会には、バルカン、ビクター、米空軍のB-52が参加して覇をきそったが、これはその続報。カラー・ページとあわせてごらんください。

このページと次ページはビクターＳＲ.2。英空軍のビクターは、現在すべて爆撃機の任務を解かれて、偵察電子戦用のＳＲ.2、空中給油機のＫ.1、Ｋ.1a、Ｋ.2のみ。ＳＲ.2が15機、給油母機は50機余装備している。

RAF Strike Command Bombing and Navigation Competition.
(Photos by Inter-Air Press)

(左上・下)ビクターＳＲ.2の１機で、シリアルＸＬ165号機。この競技会のために、主翼の増槽は、はずしてある。主翼のエンジン内側部分がのばされているのが、このＭＫ.2（２型）の特徴。右翼のこの主翼付根部分にはＡＰＵ（補助動力装置）が収められている。主翼下面にその吸気口が見える。

(上・下)同じくビクターＳＲ.2のＸＨ672号機。下の写真で、主翼上面に見えるふくらみはレーダー格納部。かたちからダッチマン"キャロット"（にんじん）と呼ばれている。垂直尾翼付根前方のふくらみは照明弾などの収納部。ＸＨ672はビクターＢ-2の生産５号機である。

このページと次ページはバルカンB-2爆撃機。〔上・右下〕スキャンプトン基地第617スコードロン所属機で、シリアルＸＬ289。この中隊は"ダムバスター"のニックネームで知られる伝統のあるスコードロン。〔下・右上〕ウォデントン連隊の第1大隊所属機。右上のＸＭ 597号機は垂直尾翼先端が改造されているのに注意。

XM597
XL389
CO2 FIRE EXTINGUISHER

ソ連航空界の話題

〔左上・中〕ツポレフTu-144超音速旅客機。Tu-144は、国内就航をめざしてボロネツ飛行機工場で最優先で量産に拍車をかけていた。その量産のために新工場も建設中であり、この工場が完成すると、量産は一挙に2倍になる見込みであった。すでに量産3号機が完成、7号機まで組立て工程に入っていた。パリ航空ショーの不運の事故が、この量産ラインにどのような影響➡

➡をあたえているか、いまのところ不明である。写真は事故にあった量産2号機（7102）で、パリ・ショーへの出発のときの撮影と思われる。写真中は客席内

〔左下〕マレーシアのサバンク国際空港のIℓ-62。Iℓ-62はアエロフロートの国際路線の主力機。同航空の国際路線のなかで、もっとも多忙な航路が、ヨーロッパと東南アジアを結ぶ直行空路、カルカッタ経由のモスクワ－シンガポール路線であるという。

〔上〕主翼端をケーブルで結んで空中給油中のツポレフTu-16バッジャー（バッジャーF）。ソ連の太平洋艦隊所属の哨戒機。〔下〕ソ連海軍航空隊で対潜哨戒任務についているKa-25ヘリコプタ。出動前の一ときである。

（TASS）

〔上2枚〕ソ連の飛行クラブの一つ、モスクワのバレリ・チャカロフ・セントラル飛行クラブ員たちの訓練の模様。陸海空軍の後援で運営されているこのクラブは、17才以上の若者たちに操縦、スカイダイビング、模型飛行機製作などの教育を行なって、航空思想の普及をはかるところ。大都市には必ず一つはあって、教育費はすべて無料という。写真上左は、ヘリコプタの障害越え。クラブ員の手に持ったひもの先端の荷物を目標に当てる競技。上右はスカイダイビング。〔右・下〕ソ連の森林監視隊の"航空部隊"。同"航空部隊"はアントノフAn-2汎用機やミルMi-1、Mi-2ヘリコプタなどを装備しており、ソ連の大切な資源である森林の監視保護にあたっている。いざ山火事となると写真右のスカイダイビング消防士がいち早く現場に降下、周辺の草木をなぎ倒しての"防火壁"造りなどにめざましい働きをする。(APN)

フォト ニュース

〔上・下〕地中海のキプロス島アクロチリ基地に駐留するイギリス空軍第84スコードロンは、このほどリマソール基地の第1153海上救難艇隊と共同で、地中海に不時着した戦闘機パイロットの総合救難演習を行なった。写真はそのときの模様で、84スコードロンのホワールウインド・ヘリコプタによる乗員吊下げ救助。写真下は現場に急行する第1153海上救難艇隊の救難艇。ホワールウインドはＲＲノーム・エンジン装備、救難艇はマーリンで、ともにロールスロイスのエンジンを装備している。

(Photos by Rolls- Royce)

〔上・左〕そのすぐれた"知能力"を生かして、アリカの環境保護、資源調などに活躍しているロッードU-2。NASA（米空宇宙局）が装備してい2機のU-2は、サンフランシスコ近郊のモフェットフィールドにあるエーム研究センターを基地に、メリカ全土を飛びまわっ高度2万メートルから各の写真撮影を行ない、森火災、病虫害、土地の浸防止などに資料を提供しる。同機が2万メートル撮影した写真は、ゴルフースのホールまで判別でる精度という。白く塗っU-2。国際スパイ機とし世間をわかした"黒い影の面影はもはやない。

〔下〕ブラジル第1のエ+タクシー会社、TAM引渡されるセスナ402。TMは同機を10機購入、ブジル国内をネットするこになる。

〔上〕ルフトハンザ・ドイツ航空は6月6日から日本航空につづいてシベリア横断路線を運航、東京〜フランクフルトの極東と欧州を最短距離で結ぶことになった。写真のボーイング707で毎週1往復、飛行時間はモスクワの1時間20分の寄港時間を含めて14時間である。

〔上〕ロールスロイスのオリンパス593組立工場を見学する日本の生産性本部研修団の一行。同本部がこのほど派遣した中堅社員研修団で、ロールスロイスの工場のほかBACのコンコルド組立工場なども見学した。

〔左〕イギリスのウェストランドとフランスのアエロスパシアル同社が共同で開発しているリンクス・ヘリコプタ。写真の機体は積載している2基のロールスロイスBS 360エンジンの飛行テストのために、ブリストルエンジン部門のテスト・センターに運び込まれた1機。

IWATA

航空機から原子力まで

展示用模型

★豊富な経験と
新らしいアイデア！

★定評ある最高の技術！

C-1ジェット輸送機
縮尺1/50模型

T-2
ジェット練習機

縮尺1/20模型

岩田ソリッドモデル研究所

東京都練馬区豊玉中3の1 TEL(991)4676

スナップ だより

〔上〕夕立ちの横田基地をタキシング中のボーイングRC-135改。以前は胴体の背にはりねずみのようなアンテナを立てていたが、今回の機体は機首のレドームが長くなり、胴体に大小の窓をつけている。7月20日の撮影（東京都・北原則幸）。
〔下〕これも横田基地に飛来したC-118B。機体下面はブルー、垂直尾翼にタイペイのワッペンをつけ、機首に鳥のマークが画かれている（昭島市・銭京隆）。

〔下〕空母コーラルシー（CVA-43）配属のC-1A。エンジン・カウリングに"ミス・サンフランシスコ"の文字。横田基地にて撮影（昭島市・大塚勝彦）。

① Mk. F. BII (MW820)、1946年、イギリス、チルボルトン基地の第54中隊所属機。
No. 54 Squadron, Chilbolton, U. K. 1946.

② Mk. II、1946年、インド駐留の第30中隊所属機。
No. 30 Squadron, RAF India 1946.

③ Mk. II、1946年、ドイツ駐留のイギリス占領空軍第33中隊の所属機。
No. 33 Squadron, RAF BAFO, Germany 1946.

④ Mk. TTV(5)、1946年、ドイツのザイレ武器訓練基地所属機。
Armament Training Station, Sylt, Germany 1946.

⑤ Mk. V(5)、第501"カウンティ・オブ・グロセスター"中隊所属機。1944−45年イギリス、ホーキンジ基地。
No. 501 "County of Gloucester" Squadron, RAF Hawkinge 1944−45.

ハインケル He 162 サラマンダー　　HEINKEL HE162-SALAMANDER

2次大戦末期，ハインケルがわずか90日間という驚異的短期間で設計，製作，飛行させた単座のジェット戦闘機。奇しくも制式ナンバーと同じ162機が完成したところで終戦となり，ついに実戦に参加することはなかった。生産機数が少なく，完成した機体もほとんど爆撃で破壊されているので，本機の写真は限られたものしかない。

〔前ページ〕戦後連合軍に押収されたHe162A-2の1機で，本機の写真ではこの機体のものが多く流布されている。本機はアメリカに運ばれてテストされ，のちスミソニアン博物館に保管されている。機体は第1戦闘航空団第3中隊（3/JG.1）の塗装である。〔上・下〕同じく戦後のHe162の1機。1945年6月6日欧州で撮影。

（USAF Photo）

162
'VOLKSJAEGER'

〔左上〕97ページと同じくドイツで押収されたHe162の1機。早急に実用化する必要に迫られ，できるだけ設計の簡易化につとめた結果，推力800kgのBMW003エンジンは背部に背負ったかたち。胴体は機首が木製でほかは金属製，翼端がドループした主翼は木製合板外皮。この翼端のドループ〈垂れ曲り〉は55度で，量産型から採用されている。上の後方から見た写真は1945年6月6日の撮影である。

〔下〕前方から見たHe162A-2 96ページのスミソニアン博物館に保管されているのと同一の機体。1945年10月5日の撮影である。主翼後縁のフラップをおろしている。簡易化に努めた結果，全備でも2,700kgという軽量で，テスト飛行では750km/hの速度を軽く出している。

〔上〕He162A-1の1機。A-1は量産初期型でBMW300A-1エンジン装備。本格的な量産型の予定であったA-2はBMW003E-1（離昇時の推力774kg）に換装して，武装も強化している。

〔下〕ヨーロッパで展示されたHe162。

戦後アメリカに運ばれたHe162A-2, シリアル120222で, 白い"23"は第1戦闘航空団（JG1）の記号。アメリカのフリーマン・フィールドとライトパタソン空軍基地でテストされ, のちにスミソニアン博物館に運ばれている。
（USAF Photo）

AIR MIN
61
120072

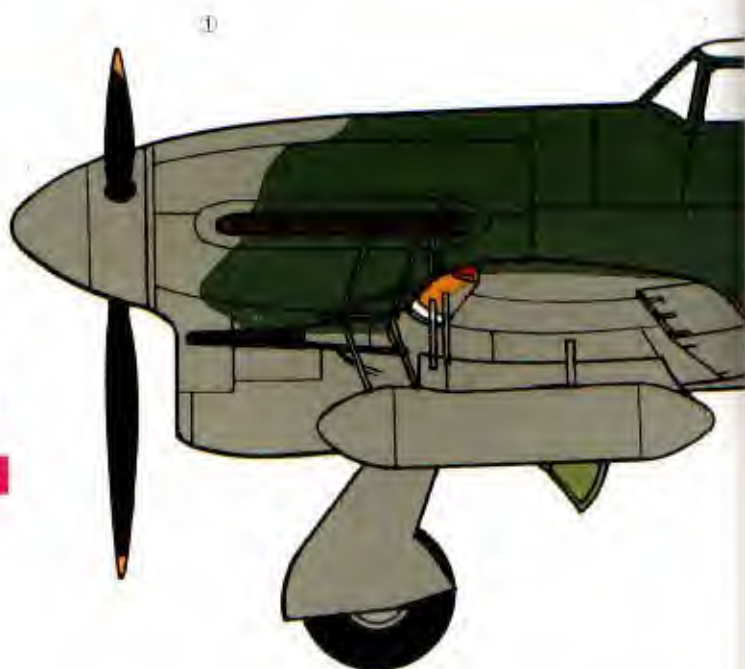
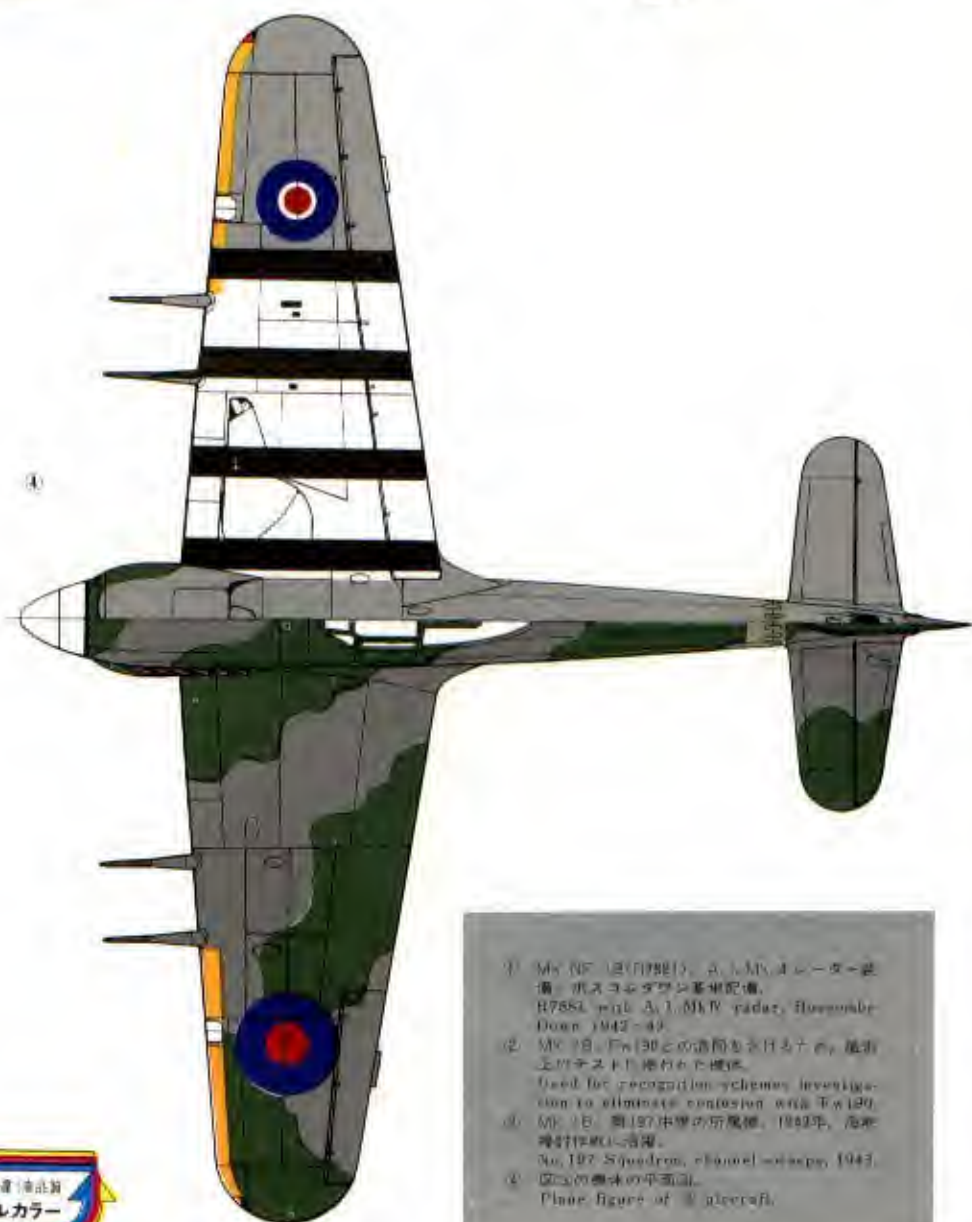
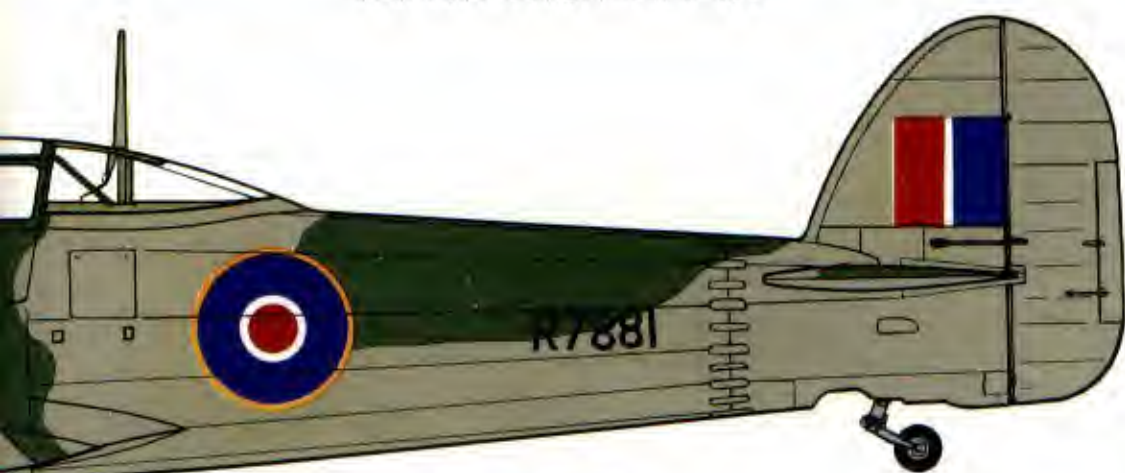
〔前ページ上〕無塗装のHe162の1機。オーストリアのウイーン近郊の飛行場で連合軍にろ獲されたもの。

〔前ページ下〕英軍にろ獲されたHe162A-2の1機(シリアル120072)。同機はイギリス本土に運ばれて4回の飛行テストを行ない，合計50分間滞空している。しかし1945年11月9日，ファーンボロで開かれた戦利品を集めての展示会の飛行の際に墜落，パイロットが死亡している。

〔上〕原型1号機のHe162V1(200 01)。この原型1号機が初飛行したのは1944年12月6日。20分の初飛行でいきなり522mph(839.8km/h)の速度を記録している。本機が初飛行したころは，すでに量産態勢がととのっていた。

〔下〕これも無塗装の1機で，英軍にろ獲されたもの。

HAWKER TYPHOON Mk. 1B

1/32 SCALE KIT

①

②

③

© A. Hashimoto

ハイモデリングのための

レベル資料集

ホーカー　タイフーンMk. 1B

HAWKER TYPHOON Mk. 1B

☆キットについて☆

1/72スケールのタイフーンMk.1Bのキットとしては世界最初のモデルであり，しかもMk.1B初期型である点でも唯一の貴重なもので，非常に注目される新製品である。

例によって精巧なエンジンを内蔵，H型という特徴のあるネピア・セイバー発動機も実感満点の仕上りで，ヒョットコの口のようなラジエータ・システムもちゃんと装備しているという豪華版。コクピットのドアが開閉し，両翼下面に爆弾2発を装備している。デカールはタイフーンで編成された中隊として有名な第609戦闘中隊の隊長機と同隊所属機の2種が附属，カラーの塗装説明図も付いているデラックスな優秀作品である。

☆塗装について☆

図①　レーダーを装備したMk.N.F.1Bで，排気管まわりは後期型と同ようにカバーがあり，両翼の20mm砲の外方に矢形のアンテナ2本と両翼端に近い部分に上下につきぬけたアンテナ2本がある点に差がある。また爆弾架の位置には増槽をつけているから，自信のある人は自作してみるのも面白い。

塗装は機体の全面がミディアム・シーグレイ(レベル・カラー⑰+㉝+①-⑦+㉚)翼上面と胴体上側面にダークグリーン㉓の迷彩があり，翼下面には国籍マークはない。

図②　フォッケウルフFw190。との混同をさけるために，機首を白く塗ってテストされた識別塗装研究用の機体で，機首が白，機体の上・側面はダークグリーン㉓とダークシーグレイ㉕の迷彩。下面はミディアム・シーグレイで主翼下面には図④と同じインベイジョン・ストライプスが記入されている。

図③と④　第197戦闘中隊所属機で，キャノピの上部に水滴形のふくらみのある機体，塗装は図③と同ように上・側面がダークグリーンとダークシーグレイの迷彩で下面はミディアム・シーグレイ，スピナは白となっている。なお，このキットにはインベイジョン・ストライプスや胴体の帯がデカールで附属している。

(イラストと解説・橋本　喜久男)

←第609スコードロン所属のMK.1B（初期型）で，キットに付属デカールがある機体。1943年，ビギンヒルで作戦中のもので，大陸の輸送列車攻撃に活躍した当時の写真。胴体のスコアマークは機関車の図案で，18個が記入されている。

↑第183戦闘中隊所属機で，キャノピ上面に水滴型のふくらみをもつ機体。主翼の機関砲は銃身カバーがなく，むき出しとなっている。シリアルはR8884。

KIT :

Revell aims right. This is the first-of-the-world 1/32 scale Hawker Typhoon Mk. 1B model kit. In particular, it is unique in that this kit is the early version of Mk. 1B. Model kit fans of these days have an expert eye, and still will feel "It's priceless".

The H-type Napier Sabre power-plant is precisely patterned. The radiation system is mounted right in what the Japanese call "Hyottoko-guchi" or a "jester's mouth". The cockpit window can be open and the main wings hold tight two bombs underneath.

Attached decals include the Commander's plane and one other of the 609th Fighter Squadron, the well-known squadron composed only of Hawker Typhoon's. A color drawing with painting hints added to the charm of this Revell masterpiece.

PAINTING :

Fig. 1. This is the Mk. 1B equipped with a radar system. Like the latter version, it has a cover over the exaust tubes. Unlike the latter version, however, this has two arrow-shaped antennae just outside the 20mm cannon of the main wing and two antennae set vertically through the wing tip. It is a fun for a modeler to make fuel tanks himself and fix them at the bomb racks.

This is totally painted medium sea gray, which can be made by mixing Revell Color (RC), 11, 35, 1, 7 and 30. The wing upper surffaces and the top and sides of the fuselage are camouflaged with RC-23, dark green. No national insignia on the under-surfaces of the wing.

Fig. 2. This is the Fowker Mk. 1B used for a painting test. The nose is painted white intentionally to avoid it from being confused with the Focke-Wulf Fw 190. The top and-sides of the fuselage is camouflaged with RC-23, dark green and RC-25, dark sea gray. The fuselage lower surfaces are medium sea gray. The invasion stripes, similar to those of Fig. 4 are described on the under-surfaces of the main wings.

Figs. 3 and 4. This plane belonged to the 197th Fighter Squadron. Noted is that it has a water-drop type swelling over the projecting canopy. Like Fig. 3, the top and sides of the fuselage are camouflaged with dark green and dark sea gray. The fuselage lower surfaces are medium sea gray, while the spinner is white. Decals for invasion stripes and fuselage band are attached to this kit.

(Drawing and Commentary by k. Hashimoto)

ロンドンのイギリス空軍博物館に展示されているタイフーンIB。シリアルはMN235。本機は1944年から45年にかけて，アメリカ空軍がFE-491の記号をつけてテストした機体でもある。現存する唯一のタイフーン。

ホーカーテンペスト

（本文記事参照）

期待が大きかっただけに実用後のトラブルではさんざんの不評をかったタイフーン。テンペストはその発達型で、大戦航空史に記録されるべき高性能機。ハリケーン以来のホーカー技術陣の努力が実を結んだ傑作戦闘機であった。参戦は大戦末期、わずかの期間であったが、飛行爆弾V1の迎撃に大活躍、欧州戦線の空戦にとどめをさした最後のレシプロ戦闘機であった。

〔前ページ〕テンペストV（5）の量産初期型シリーズ1。テンペストはネピア・セイバー　エンジン装備のMk.IとMk.V、ブリストル・セントーラス　エンジンのMk.II、グリフォン・エンジン装備のMk.IIIが造られたが、量産に入ったのはMk.VとMk.IIのみ。Mk.Vの量産1号機は1943年6月21日に初飛行、1945年8月までに800機が生産された。2,180HPのセイバーIIエンジンを積み、主翼に20mm機関砲4門装備。初期のシリーズまでは、写真のようにこの銃身が主翼から前方に突き出ていたが、後期のシリーズIIでは、短い銃身となって、主翼内に収まっている。

〔上・左下〕ＳＡのコード・レターをつけた第486スコードロンのテンペストＶ。第486は、第3スコードロンとともにテンペストＶを装備した最初の部隊。1944年５月にニューチャーチ基地で本機を受領、タイフーンに代えて迎撃任務についている。写真上は代替の頃のもので、後方はタイフーンⅠＢ。〔下〕後方から見たテンペストＶシリーズ１。楕円形平面の主翼、垂直尾翼前方のひれが本機の特徴。

〔上〕前ページと同じく第486スコードロンのテンペストVシリーズ1。1944年夏、ニューチャーチ飛行場にて。第486はニュージランド空軍第2の戦闘中隊として1942年3月にイギリスで編成された部隊。テンペストVを装備してからは、英本土防空の任につき、V1飛行爆弾223発を撃破する戦果をあげている。のちにはMe262の迎撃にも活躍した。テンペストVを装備した部隊は、全部で12個スコードロン。迎撃任務のほかに、長距離性能を生かして北ヨーロッパ深くまで進攻、飛行場やレーダ基地、飛行爆弾発射基地の攻撃でも大いに働いている。

〔下〕テンペストIIは2,526HPのブリストル・セントーラス空冷エンジンを積んだテンペストIIは東南アジア方面の対日戦用に開発した型。落下増槽をつけて航続距離は最大1,640マイル（2,639km）、最大速度440mph（708km／h）という高性能で、主翼下に爆弾2,000ポンドを装備することもできた。しかし量産1号機が初飛行したのは1944年10月、部隊に配備されたのは45年11月で、実戦には1機も参加できなかった。46年までにホーカーとブリストルで472機が生産され、1,000機余がキャンセルされている。写真の機体は後期生産型の戦闘爆撃型。

（上・下）同じくテンペストⅡで、ホーカー製の初期の生産型。写真下の機体は、主翼下に45ガロン増槽2個をつるしている。

テンペストⅡを最初に装備した部隊は第54スコードロン。そのほか7個スコードロンが本機を装備しているが、英本土内で本機を装備したのは第54のみで、ほかはすべてドイツ、インド、東南アジア方面の海外駐留部隊である。第54スコードロンは1946年9月に機種改編したが、ホンコン駐留の第33スコードロンは双発のデハビランド・ホーネットに機種を変える1951年まで本機を使用、インドとパキスタン空軍では1953年までこのテンペストⅡを使っている。

これらの日本機はどうなったか

What Happened to Those Japanese Planes ?

by Robert C. Mikesh

Enroute from Japan to the USA on USS BARNES in Nov. 1945: the Japanese war planes N1K2-J, J1N1, C6N1, Ki45, Ki46 and Ki48.

(本文記事参照)

戦後、性能の評価テストなどでアメリカに持ち去られた日本の大戦機は確認されているだけでも145機。日本各地から各種の陸海軍機が追浜の海軍基地に集められ、横須賀から空母に積まれてアメリカに運ばれた。

途中、嵐にあって、その一部は海上に捨てられたとも伝えられるが、真偽のほどは不明である。各港に陸あげされた日本機は、陸海軍の関係基地に送られてテストが行なわれているが、なんといっても戦利品。一部をのぞいて、どのような調査が行なわれたかという明確な資料はなく、テスト後の各機のあしどりについては、いまとなっては知る由もない。ただいまアメリカに現存するものわずかに10数機。ここの写真は、その輸送途中とアメリカに到着したばかりの一部である。ロバート・ミケッシュ氏の本文記事（143ページ）とあわせてごらんください。

〔前ページ〕アメリカへの輸送途中、空母ＣＶＥ-20バーンズ号上の日本軍用機。前方左隅に紫電改（Ｎ１Ｋ２-Ｊ）、中列右が月光（Ｊ１Ｎ１）、中央に彩雲（Ｃ６Ｎ１）、左に屠龍（Ｋｉ45）が並び、後列は右から100式司偵（Ｋｉ46）、彩雲、99双軽（Ｋｉ48）。1945年11月。

〔右〕強風（Ｎ１Ｋ１）の尾部と零戦21型（Ａ６Ｍ２）。1947年５月、ノーフォーク海軍基地にて。〔下〕これも47年５月ノーフォーク基地の紫電改。後方に強風の機首が見える。〔右下〕空冷エンジン装備の彗星43型（Ｄ４Ｙ４）同じく47年５月ノーフォーク基地の撮影。本機はここからロングアイランドのフロイドベネット飛行場に運ばれて、スクラップにされたという。

The Japanese war birds at NAS Norfolk, May 1947. (Upper)N1K1 KYOFU and A6M2 ZERO. (hower left) N1K2-J SHIDEN-KAI (hower right)D4Y4 SUISEI .

末発表　大陸の日本陸海軍機

(Photos by Mr. Koji Kato)

太平洋戦開戦前の昭和12～13年頃、当時の満州国奉天飛行場で撮影した陸海軍機。写真提供は、当時整備隊員として大陸に渡っていた加藤光二氏（准尉）〔上・下〕13式3号艦上攻撃機（B1M3）のオンパレード。本機は大正末から日華事変初期までの海軍の主力艦攻。なかには92式艦上攻撃機（B3Y1）も混っているのは注意。

Mitsubishi B1M3 and Kugisho B3Y1

〔下〕試作川崎キ5戦闘機。川崎が92式戦闘機の後継機として昭和8年に試作した逆ガルの低翼単葉戦闘機。エンジンは川崎BMW-9を改良した液冷のハ-9 I（離昇出力850HP）装備。昭和9年に1号機が完成。主翼の上・下反角や胴体、脚、プロペラを変えた4機が造られ、各種のテストが行なわれたが、軍の採用するところとならなかった。写真は2翅のプロペラを付けた1号機で、上部のエンジン・ナセルをはずしている。本機の写真は非常に珍しい。写真向かって右側が写真提供の加藤光二氏。

Kawasaki Experimental Ki5 Fighter.

Army Type 91 Fighters, 1937–38, Mukden, Manchoukuo.

Army Type 97 Fighter (ki27) flying over Mukden Air Fielb.

〔上〕中島91式戦闘機1型。昭和6年に陸軍に採用された最初の純国産戦闘機。採用後まもなくぼっ発した上海事変では、"征空用"戦闘機として、長距離侵攻攻撃で大いに活躍している。軽快なパラソル形式の主翼、胴体は全金属製モノコック構造、主脚にはスプリング・オレオ式の緩衝装置を持った当時としては世界水準をいく戦闘機であった。ジュピター7(離昇出力520HP)エンジン装備。寿2型に換装した2型も造られている。

写真は格納庫に入っていた全機をひっぱり出して整備、並べたものという。

〔右〕固定脚の傑作機中島97式戦闘機(キ27)。加藤氏が97式司偵に同乗して撮影したもの。

ブリストル　ボーフォート

ボーフォートは複葉のビッカース ビルドビーストの後継機として造られた雷撃・爆撃機。1940年から43年まで、沿岸航空隊の標準型雷撃・爆撃機であった。ブリストル・トーラスVIエンジン(1,130HP)×2のボーフォートI、アメリカ製のツイン・ワスプ・エンジン(1,200HP)を積んだボーフォートIIがありそれぞれ965機と415機が生産されている。1940年1月から部隊に配備され、北海、英仏海峡、地中海から大西洋にかけて機雷敷設、爆撃、雷撃と1944年まで使われている。

L
4441

L4441

〔左ページ上・下〕1938年10月15日に初飛行した原型1号機（L4441）。のちのボーフォートIにくらべて細部が大きく異なっており，いちばん目につくのはエンジン・ナセルと主車輪カバー。排気管の位置を変え，脚出しのときに偏揺れの原因となるため大きなエプロン式の主車輪カバーは横開き式に改め，そのほか爆撃手席風防を平面ガラスにし，後方銃座を2連装にするなどの改造をしている。

〔上・下〕ボーフォートI量産型。Mk.Iは当初トーラスIIエンジン（1,010HP）を装備していたが，のちにトーラスVIに換装，武装を強化して，写真上のように機首下面に透明の砲塔を設け，7.7mm機銃2挺を装備した。写真上の機体は，第22スコードロンにつづいてボーフォートを受領した2番目の部隊第42スコードロンの所属機。

〔上〕雷撃に向うボーフォートⅠの1機。胴体下には18インチの1,605ポンド魚雷1発を半埋込式に装備している。

〔下〕ツイン・ワスプ・エンジンを積んだボーフォートⅡ。Mk.Ⅱの量産1号機は1941年9月に初飛行、415機が生産されたが、後半の一部は背部の砲塔をはずした練習機として生産ラインを出ている。ボーフォートはMk.Vとしてオーストラリアでも700機を生産しており、各型を含めた総生産機数は1,380機であった。オーストラリア製のボーフォートはシンガポールに配備され、ソロモンやニューギニア方面に進出、太平洋の日本軍艦艇攻撃にも参加している。

〔上〕SABENAベルギー航空が、ハンドレページW8Fにつづいて、1929年に発注した3発のフオッカーF・Ⅶ（7）。乗客10人乗りで、時速192km／h。SABENAでは本機を30機ほど装備しているが、そのうち7機はアフリカに送られている。本機は息の長い“エアライナー”で、サベナが最後の1機を路線から引退させたのは1943年であった。

エアラインの翼

SABENA ベルギー航空 ②

〔左〕1920年後半のブラッセル“空港”待合室。飛行場は市の中心街から5キロほど北東のハーレンというところ。待合室は木造だが当初のころの“丸太小屋”とは格段の相違で、ブルーと白のペンキで、せいいっぱい意匠をこらしている。この建物もまもなく改築されて，バーなどの設備もそなえた近代的なものとなった。右端にエア・ホステスが映っている。

〔右〕1920年に創立されたベルギーの飛行機製造会社SABCAがライセンス生産したハンドレページW8Fの3発型。サベナでは本機を5機導入した。写真の機体“プリンセス・マリー・ジョー”号は1925年2月に、ベルギーからアフリカのザイルまで記録的な探検飛行を行なった1機である。

B-29 IN ROK: From Mojave Desert, Calif. to the 5.16 Memorial Plaza, Seoul

韓国のB-29

分解・輸送・組立から展示まで

本誌7月号既報の韓国ソウル市郊外の5.16広場に展示されているB-29スーパーフォートレスは，アメリカ空軍から寄贈されたもの。米海軍のミサイル攻撃テストの標的に使用するためにカリフォルニア州のモハーベ砂漠に運ばれたボーイング・ウイチタ工場製のB-29-00-WAの1機。モハーベ砂漠から韓国に運ばれて展示されたが，その経過のスナップをご紹介することにしよう。

［下］モハーベ砂漠から船積みのために分解されてロングビーチに運ばれたB-29の主翼部分。

Dismantled in 23 pieces for shipment

［左下］モハーベ砂漠で分解されるB-29，エンジン・ナセルと主翼を分解中。手前は前輪。

Dismantling work at Mojave, 4 weeks starting March 1972

(Photos by KAP Chong Chi/UN Korean War Allies Assn., Inc.)

5.16広場に、T-6、F-86D、P-51DなどとともにB展示されているB-29。今年の4月の撮影。

·〔右下〕仁川港に到着、5.16広場まで運ばれる胴体部分。主尾翼、胴体を23個に分解梱包されたB-29は、1972年5月18日にロングビーチを出港、6月4日に仁川港に到着した。胴体は尾翼部分のほか四つに分解されたが、写真は機首と後部胴体。

eft Long Beach, 18 May 1972

Arrived at Inchon, 4 June 1972

〔下〕モハーベ砂漠で韓国への輸送を待つB-29。後方にも同型機が数機見える。もっとも程度の良いものが選ばれ、ラダーに傷が見えるのみでほぼ完全な外形。写真は1971年3月の撮影。分解作業は翌72年3月末から4週間にわたって行なわれた。

This was chosen at Mojave. Photo, March 1971

5.16広場に運び込まれたB-29の組立ては、韓国空軍の整備隊が担当した。F-4ファントムやF-5など最新のジェット戦闘機を手がけている隊員たちも、B-29は見るのがはじめて。苦心の組立て整備であったという。

72年6月6日から組立て作業を開始、25日間かかって6月30日に終了した。左の写真3枚は組立て中のもので、上が作業開始の頃、中と下は10日後の6月15日の撮影である。上の写真は20日目の6月24日で、完成まぢか、右は6月30日、見事に復元されたB-29。写真右下は今年の6月10日の撮影。すっかり名物となった5.16広場の大戦機。ソウルや遠くからの見物客でにぎわっている。

Deisplayed at the plaza. Photo, April 1973

U.S. AIR FORCE